

## 教員活動状況報告書

提出日：令和 5 年 3 月 22 日  
 所 属： 生命・環境科学部 環境科学学科  
 氏 名： 村山 史世 職位： 准教授  
 役 職：

## I ティーチング・ポートフォリオ

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲）

環境科学科および全学部全学科の 1・2 年生向けの教養科目・導入科目を主に担当している。高校までの学修と専門科目の接続時期の学びを担当している。学生には広い視野と「学び方を学ぶ」ことを身につけてもらうのが、主たる役目となる。また SDGs など、専門知識をつなげて総合化する手法を考えてもらうことも教育的な責任である。

ジェネプロ「SDGs Science Shop」で環境科学科 1 年生 2 人、動物応用科学科 1 年生 1 人を受け入れている。

| 科目名          | 学科・専攻    | 必, 選, 自 | 配当年次 | 受講者数 |
|--------------|----------|---------|------|------|
| 人権論          | 環境科学科    | 選択      | 1    | 82   |
| 法学入門         | 環境科学科    | 選択      | 1    | 87   |
| SDGs と未来共生科学 | 環境科学科    | 選択      | 1    | 75   |
| 地球環境科学       | 環境科学科    | 必修      | 1    | 78   |
| 地球共生論        | 全学部・全学科  | 必修      | 1    | 518  |
| 日本国憲法        | 全学部・全学科  | 選択      | 1・2  | 97   |
| 地域コミュニティ論    | 環境科学科    | 選択      | 2    | 8    |
| 環境フィールドスタディ  | 環境科学科    | 選択      | 2    | 8    |
| 科学技術英語       | 環境科学科    | 選択      | 3    | 0    |
| リサーチローテーション  | 環境科学科    | 選択      | 2    | 54   |
| 卒業論文         | 環境科学科    | 選択      | 3・4  | 8・5  |
| SDGs と未来共生科学 | 環境科学科    | 自由      | 4    | 5    |
| 科学者・研究者論     | 環境保健学研究会 | 必修      | 1    | 36   |

## 2. 教育の理念（育てたい学生像, あり方, 信念）

・学生を支援しても支配しないことを心がけている。私は大学院博士課程で指導教授からアカハラ・パワハラを受けた経験がある。指導教授は私を支配しようとした。その後アメリカに留学した時に指導教授は「君は何しにアメリカに来了？私は君にどんな何を支援できる

のか？」と接してくれた。支援と支配に関して、私には恩師と反面教師がいる。

- ・学生の意欲を大切にする。意欲は学力の基盤、学ぶこと、生きることのエンジンであるから。

- ・学びは、教員が企て、学生が完成させる。この相互作用のコーディネートが教員の責任である。良い相互作用が生じる学習環境に気を配りたい。

- ・学生が卒業後も自立して生きてゆくためには、学び方を学ばせ、学生の興味・関心を尊重してゆきたい。

- ・講義は、学生が世界で生きてゆくための準備であり、手段である。講義を自己目的化すべきではない。

### 3. 教育の方法（理念を実現するための考え方、方法）

#### 方針

- ・オンライン授業においても、「離れていても共に学んでいること」を体験させたい。
- ・相互評価や相互参照、対話を通じて、協同的な学びを実現したい。
- ・学生が自分で問いを立てて、自分で調べ、自分で考えて、自分で回答を見つけて、理由を自分の言葉で表現できるように教員として支援してゆきたい。
- ・14回の講義が終わったのちに、学生に遺るものを考えて講義したい。
- ・大学で学んでいることと現実世界がつながっていることを学生に体感させたい。

#### 方法

##### 授業の動画について

- ・授業動画は共有して学生が見返せるようにした。
- ・期末試験をやめて、毎回の出席課題と期末レポートで評価することにした。
- ・後期日本国憲法においては、期末レポートの課題提示を11月中に行い、学生に学びの期間を確保した。

##### 授業の資料について

- ・スライドはPDFにして学生が見返せるようにした。
- ・毎回の出席課題において、発問によって授業内容を振り返り、期末レポート等への準備ができるようにする。
- ・出席課題は、学生による相互参照・相互評価が可能な設定にして、他の学生の達成度を意識してもらうようにした。協同学習へはまだつなげられていないが、孤独な学びを多少とも緩和できた。
- ・出席課題で出された学生の疑問や質問、意見に応えるような授業構成にした。
- ・現実の事件や事例などを授業の教材にして、現実世界とのつながりを意識してもらうこ

とにした。

授業の進め方について

- ・知識の一方的伝達だけを強調しないで学生が考えたり、調べたりするワークや時間を確保している。
- ・学生の発言や想いを拾い、学生と共に言語化をする。

#### アクティブラーニングについての取組

- ・調べもの学習や外部へのプレゼンテーションなどを行った。(環境フィールドスタディ)
- ・オンライン方式では、反転学習も導入した。
- ・「ブレイクアウトセッション」を導入して、ディスカッションの時間を確保した。

#### ICT の教育への活用

- ・学理で課題を相互参照させている。

#### 4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）（分量の目安：15～24 行（600 字～960 字））

現在の授業実践・教授手法をどのように改善していますか。

（①から⑤まで個別に記載又は①から⑤までまとめて記載ください）

①教育（授業，実習）の創意工夫（A～C）

②学生の理解度の把握（A～C）

③学生の自学自習を促すための工夫（A～C）

④学生とのコミュニケーション(質問への対応等)（A～C）

⑤双方向授業への工夫（A～C）

※A（十分実施している） B（実施しているが十分でない） C（うまく取り組めていない）

取組の項目において、A が（十分実施している）、C が（うまく取り組めていない）ならば、いずれもあてはまらない。したがって、すべての項目で B（実施しているが十分でない）となる。

担当している科目が主に 1・2 年生の教養科目であり、選択科目である。必修と異なり、学生自身が選択して履修している。最後まで履修する学生は、毎回の出席課題もよく調べ、よく考え、質的にも量的にもたくさん書いてくれている。学びは、対面方式の時よりも深まったと思われる。

⑥国家試験対策としてどのような取組をしましたか。（V 学科，M 学科の教員の方のみ記載してください。）

## 5.学生授業評価（分量の目安：4～7 行（160 字～280 字））

①授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

・大学として昨年度ほど授業評価を積極的に活用しなくなった。呼びかけても活用方法が明示されず、学生への負担のみになった。

② ①の結果はどうでしたか。

・授業評価では、一般的に肯定的に評価された。

③ ②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。

・現在の取り組みを継続したい。

## 6.学生の学修成果（分量の目安：4～7 行（160 字～280 字））

①学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

（参考となる取組については，学内で共有させていただく予定です。）

・期末試験をやめて、毎回の出席課題と期末レポートで、深く考え、論理的に記述してもらうことで、暗記型知識ではなく、体系的知識と、現実世界においても活用できる知識を身につけさせる、という方法は対面方式でも継続する。

・対面方式であっても、ブレイクアウトセッションなどを活用した協同学習を試行したい。学生による課題の相互参照・相互評価は継続する。

・学生が言葉にできなかったり、しなかったりする気持ちや価値観にも配慮する。

②教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

- ・学生からの授業評価では、ブレイクアウトセッションや相互参照、出席課題へのフィードバックが評価された。

7. 指導力向上のための取組（FD 研究会参加状況）（分量の目安：1～2 行（40 字～80 字））

- ・教務課主催のFDにはほぼ参加した。

8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）

- ・短期的には学生の満足度をあげたい。
- ・中期的には、協同学習につながるような、対話型授業、相互評価の手法などを開発してゆきたい。
- ・また、知識の伝達だけでなく、学生が学びを楽しめるための手法の開発をしてゆきたい。
- ・自らは、ファシリテーターとしての技量をもっと豊かにしてゆきたい。
- ・長期的には、暗記力では評価できないような知識の定着と評価方法を試みたい。
- ・毎回の出席課題及び期末レポートの提出率を上げたい。
- ・GIS 教育を担当することになった。デジタルマッピングに興味を持つ学生を増やしたい。

9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ

特にない。